訪問教育　コミュニケーション力の向上を目指した授業改善

1　はじめに

訪問教育では、研究を進めるにあたって、まず「生きる力」について話し合った。学校卒業後ほとんどの生徒が、家庭や施設で生活することから、豊かな人生を、「家庭や施設の中で様々な人とつながり、毎日を生き生きと過ごすこと」と考えた。どこで生活していこうとも、家族以外の人と必ず関わっていかなければならなくなり、家族以外の人との関わりや、家庭以外の場所で過ごすことが本人にとっての自立となる。そのときに本人も保護者も気持ちよく、気楽に、安心して、楽しく過ごせるようになってほしい。そして、その「豊かな生活」を送るために必要な「生きる力」を

・生活のリズムを身に付け、健康に過ごす力
・環境・状況の変化に対応し、楽しめる力
・様々な人と関わる力
・コミュニケーション力

と考えた。卒業時にこの中の何か一つでも意思表示できるものを持っていることで、人との関係が広がってくるのではないかと考え、「コミュニケーション力」を共通のテーマとして取り上げることにした。本プロジェクトでは、「生きる力を伸ばすための「コミュニケーション」に関する指導目標を達成するために必要な指導内容、支援の方法、学習意欲の喚起の方法、言語技術など、授業者としての課題を明確にし、PDCA サイクルを活用した授業改善を行い、一人一人に応じた授業を展開していきたいと考えた。すべての感覚を刺激するような活動内容の中で、「見て、聴いて、触れて感じたこと」を授業の中でどれだけ伝え合うことができるかを目指し、それぞれが授業改善に取り組むこととした。また、学習指導案の作成、検討、授業研究会を通して、訪問教育担当者全員が訪問教育児童生徒全員を理解することに努め、共通理解を深めて行事や合同授業に生かすことができるよう取り組むこととした。

2　目的

（1）コミュニケーション力の向上を目指した授業のあり方について研究する。
（2）個別の指導計画の活用や、授業研究会を通し、訪問教育児童生徒全員の共通理解を深める。

3　方法

（1）個別の教育支援計画、個別の指導計画、指導記録の作成と活用
（2）PDCA サイクルによる授業改善の実践

4　実践内容

（1）個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成

児童生徒の実態・教育的ニーズの把握を的確にするために、最初の授業で前担任からの引継ぎを行った。記録を読むだけでは分かりにくいことも実際に子どもを目の前にして引き継ぐことができるので、具体的な指導内容が分かりやすく、有意義なものとなった。MEPA―Ⅱの検査により、特にコミュニケーション面での実態把握を行った。保護者とは、日々の授業や懇談、連絡帳などで積極的に情

報交換を行い、保護者の願いをくみ取り、協力し合いながら授業が進められるようにした。関係機関との連携については、必要に応じて行ったが、各機関とも協力的であり、助言、御指導をいただく中で、効果的な連携が図られた。これらの実態把握をもとに、目標を設定し、将来、児童生徒が豊かな生活を送るために今何が必要かを考え、抽象的な表現を改め、達成可能な具体的な内容にした。指導目標を達成するための年間指導計画の作成では、項目を行事等、日常生活の指導、遊びの指導、生活単元学習、各教科、自立活動とした。自立活動においては６区分２６項目の中から必要とされる項目を選定し、それらを相互に関連付けて具体的な指導内容を設定するようにした。

（２）指導記録の様式検討、作成

日々の指導記録として、指導内容や児童生徒の様子を書いているが、内容が多くなりがちで後で読み返すのが負担になってきているため、様式の検討をした。指導記録を書く意味を、授業の記録と評価、有効な引き継ぎと捉えた。指導記録の項目を、指導内容、生活単元学習、自立活動、特記事項とし、要点を簡潔に書くことを心掛けるようにした。特記事項には、健康の記録、保護者との懇談、関係機関との連携を詳しく記入することとした。

（３）授業評価シートの検討、作成

本校用の授業評価シートと昨年度訪問教育で作成した授業評価シートを比較、検討した。訪問教育の場合、重度重複障害という実態から評価しなければならないことも含め、身体に関する事項、視覚、聴覚的支援などの項目を取り上げ、26の視点を設定した訪問教育用の授業評価シートを独自に作成した。

参観者授業評価シートは、数字で評価することとし、３段階（A・よい　B・ふつう　C・要改善）とした(資料１)。

授業評価シートの作成を通して、訪問教育の授業をする際に配慮しなければならないことを確認し合い、学習指導案を作成する際の指針とした。

（４）授業実践

対象児童生徒を一人決めて学習指導案を作成し、学習指導案の検討を訪問教育担当者全員で行って、授業を行った。授業後、授業自己評価シートをもとに授業の検討を行った。

その中で２名が焦点授業として授業の様子をＶＴＲに撮影し、授業研究会をそれぞれ２回行った。学習指導案の検討は訪問教育担当者全員で行い、ＶＴＲによる授業研究会には、小･中・高等部の教師も参加した。その実践について以下にまとめる。

ア　授業実践１

（ア）対象生徒の実態

中学部２年生女子。物や人に関心を示し、注視や追視をする。音楽が好きで、聞いたり、自分でキーボードを弾いたりして楽しむ。座位がとれ、つかまり立ち、四つばい姿勢がとれる。簡単な指示は理解している。意思や感情は表情や行動で表現する。MEPA―Ⅱの検査では、コミュニケーション分野で第３ステップから第４ステップへ移行している段階で、要求を自分から何らかの形で相

手に分かるように伝えることが課題となっている。新しい環境、人に慣れるまでに時間がかかり、笑顔や発声などが授業の中では十分には見られない。

（イ）指導のねらい

1回目の授業では、本校学習の事前学習を通して野球やサッカーのおもしろさを体験し、感じさせたいと考えた。また、応援グッズを作り、友達の応援をすることでゲームの雰囲気を感じ、友達を意識することにつなげたいと考え、「仕事体験をしよう」という単元を設定して授業を行った。

2回目の授業では、学習を通して光や色、季節や自然の変化に気づき、興味を持ち、そのおもしろさを表現させたいと考えた。そこから、自分からやってみよう、見てみようとする意欲を高め、自発的な活動へとつなげていく中で周りの人との関わりを増やし、共感し合い、毎日の生活を少しでも豊かにしてほしいと考え、「光と色を見て触れて感じよう」という単元を設定して授業を行った。

指導案抜粋（２回目の授業）

4　学習指導計画

第１次　戸外で光と影で遊ぼう・・・・・・・・・・・・・・・２時間

第２次　光と色を楽しもう・・・・・・・・・・・・・・・・・５時間（本時その２）

第３次　光を通す素材を使ってクリスマス飾りを作ろう・・３時間

5　本時の指導

（１）目標

○ 光を通して変化する素材、色に興味を持ち、見て、触れて楽しむ。

○ カラーセロハン、ビーズなどを用い、作品を作る。

（３）本時の展開

	時間	学習活動	教師の支援と手立て・評価の視点
学習展開過程	40分	4　光と色を見る、触れる ・「あおくんときいろちゃん」の話を聞く。	・話に合わせて、カラーセロハン紙、色画用紙で作った様々な色をパネルシアター上で動かしていく。 ・話の中で出てくる呼び掛けや、擬態語、感情の表現を強調し、発声や動作化を促す。 ・青と黄色を重ねて色が変わる場面は、ゆっくりと繰り返しやって見せる。 様々な色に興味を持ち、見ていたか。 お話を楽しんでいたか。
		・光を通す素材に触れ、見る。	・数種類の素材を机に並べ、自由に触れられるようにする。 ・光にかざして見えるよう、提示の仕方を工夫する。

学習展開過程		・窓に貼る作品を作る。	・箱にはしきりをつけておく。 ・興味を持ち、手に持った物を、箱に入れるようにするが、必要に応じ、手を添えたり、目の前で提示したりするなどの支援を行う。 箱の中に材料を入れ、作品を作ろうとしたか。
		・窓に貼ったり、つるしたりした物に触れ、見る。	・言葉掛けをし、注目させながら窓に貼っていく。 ・ジェルシールを感触を楽しみながら教師と一緒に貼る。 ・立位、座位などいろいろな姿勢や角度、距離から見るようにする。 ・生徒の様子を見ながら、共感的な言葉掛けを行う。 光や色に興味を持ち、自発的に触れたり、見たりして楽しめたか。

（ウ）授業改善への取組

a　単元設定、指導計画の見直し

1回目の授業研究では、単元設定において年間指導計画や普段の学習内容との関連について十分に吟味されていないという反省があり、本人の実態や興味・関心から単元を設定する必要性を感じた。そこで、もう一度実態把握を行い、授業研究会や参観者授業評価シートで指摘されたアイデアを参考に、生活に結び付いた身近な、意味のある、興味・関心を持ちやすい単元設定を考えた。2学期は、色をテーマとしたことから、制作活動、絵本の題材などで色を意識した学習を多く取り入れてきた。その関連で、2 回目の授業は、戸外で光や影、木々の紅葉の様子、変化を感じる。光る素材やセロハンを使って光と色を楽しむ。光を通す素材を使って作品を作る。という指導計画を立て、生徒が興味を持ちやすい素材を用いて光と色を関連付けた学習を計画した。

b　「見て、聴いて、感じたことを伝え合う」ための授業の進め方の見直し

教師主導で授業を進めると、自発的な動きがほとんど見られない、受身的な授業となるという 1 回目の反省から、発声や動作化を促し、生徒が自分で選んで行動する場面が増えるよう、教材の提示の仕方や、言葉掛けを工夫した。具体的には次の4点である。

・話の中に出てくる呼び掛けや、擬態語、感情の表現を強調し、発声や動作化を促すようにする。

・生徒が自分で選択する場面を多く持つようにする。

・生徒の表情や動作から生徒の気持ちをくみ取り、代弁し、共感し合う。

・立位、床座位などいろいろな姿勢で活発に活動するようにする。

（エ）課題

学習指導案では、実態把握を的確に行い、単元観、生徒観、指導観を整理して授業に臨むことが良い授業につながり、生徒一人一人が豊かな生活を送

っている具体的な将来像を思い描きながら、今必要なことは何かを考え実践していかなければならないことを痛感した。PDCA サイクルを活用した授業実践を行うことで、プランは少し向上したが、実践の段階では計画通りにいかなかった。その原因は、実態把握が的確にできていないことであり、生徒の起こりうる様々な場面を想定し、２番目、３番目の方法で対処していけるような柔軟な姿勢で授業を行っていく必要性を感じた。また、コミュニケーション力の向上を目指した授業では、教師のコミュニケーション力も必要になってくる。教師のコミュニケーション力を向上させるためには、生徒の表情や行動を受け止め、その意図や要求を推測し、言葉にして伝えることを毎回の授業で心掛けることが大切であろう。今後も常に心掛けていきたい。自分の授業を VTR を通して客観的に見て、他の教師の評価を得て、改善点がはっきりしてきた。自分では全く気付かず、無意識にしていたことも配慮していかなければならないことがたくさん出てきた。これらを常に考えながら、これからの授業に取り組んでいきたい。

イ　授業実践２

（ア）対象生徒の実態

中学部２年生女子。脳性まひ、慢性呼吸不全。経口経管栄養で気管切開、咽頭分離手術を行っている。顔面にまひがあり、視力は測定不能。MEPA―Ⅱのコミュニケーション分野において、芽生え反応(±)や反応や行動が明らかに観察できた(＋)と評価できる項目が増えてきている。自力移動不可で１日の大半をベッド上で仰臥位の姿勢で過ごしている。

（イ）指導のねらい

個別の指導計画において、コミュニケーションの確立を大きな目標としている。授業では目標を達成するために、物語の読み聞かせや、スイッチを使用したゲームや音楽を聴く活動を取り入れている。

１回目の授業では、物語の読み聞かせを通して、あらすじや主人公の気持ちを理解させ、生活の中で抱いた感情を表出できる手掛かりにつなげたいと考えた。また、季節に沿った物語を読むことで季節や天気に関心を持つようになることをねらいとした。

学習指導案抜粋(１回目の授業)

５　本時の指導

（３）目標

○　教師と一緒にその雰囲気を感じ取る。

○　「怒る」表出をする。

（５）本時の展開

	時間	学習活動	教師の支援と手立て・評価の視点
学習展開過程	20 分	６　お話 ・「あめふり」のお話を聞く ○お話が始まることを知る。	・足裏に霧吹きで水をかけ、お話に対する期待感を高める。 期待を持つことができたか

学習展開過程		○雨が強くなる様子を知る。	・足裏に霧吹きで水をかけるとともに、効果音を使用し、イメージが持ちやすいよう伝える。 雨が強くなる様子を感じることができたか
		○主人公の気持ちになって怒ってみる。	・舌を動かしたり、舌を少し前に出して「怒る」表出をするよう言葉掛けや触って促す。 「怒る」表出ができたか
		○キーボードを使って雷を表現する。	・鍵盤が弾きやすいよう腕下にボールを置き、自分で弾くのを待つ。 自分で鍵盤を弾き、音を出して表現できたか
		○雲を洗濯する疑似体験をする。 ○晴れの天気を感じる。	・足の指で雲に見立てた綿を持ち、教師と一緒に洗濯する動きをすることで、場面の様子がイメージできるよう働き掛ける。 ・「晴れ」の天気を、プッシュライトのあたたかさを通して、感じるよう働き掛ける。 「晴れ」の天気を感じることができたか

２回目の授業では、スイッチ教材を使用し、スイッチの操作方法を理解するとともにスイッチを自分の意思で操作し、意思表示をする手段として活用できるようになることを目指したいと考えた。

（ウ）授業改善への取組

Ａ子と関わっていく中で、意図的に動かす部位が、首・舌・口・腕・指先・足であることが分かった。それぞれの動きの大きさは様々であるが、舌の動きは、感情によって動く速さや動かし方が微妙に違うことが見られた。

物語を通して「怒る」という感情を舌を使って表出する方法を練習していたとき､舌を少し前に出して相手に伝えるよう言葉掛けをしたり舌を触ったりして促すと、舌を激しく動かし、舌を前に出そうとする姿が見られた。「やってみよう」という気持ちがあることが分かった。また、何かを一生懸命やってみた後には、大きく息を吐くことも多々見られた。しかし、見てはっきりと分かる動きには至らなかった。

１回目の授業研究会で､物語を通すだけでは感情を表現することが難しいのではないか､いろいろな体験、経験を通して感情を表現できるようにしてはどうかという指摘を受けた。１回目の授業や日々の様子から、コミュニケーションの確立を図るためにスイッチを用いることの有効性を感じ､センター的機能を活用して、しげのぶ特別支援学校からスイッチ教材の活用について、指導、助言をいただいた。Ａ子に合ったスイッチを選び、スイッチ操作ができる部位を見つけ、操作方法を練習することで意図的に操作することが期待できる。

スイッチ教材は、ひもスイッチ・筋電スイッチを使用し、主に、好きな音楽を選曲して聴く活動を行った。また、パソコンとつなげたスイッチを操作して風船割りゲームを行い、ひもスイッチを指先につなげて使用した。引っ張る力が弱かったり、どうしていいのか分からず戸惑いを感じていたりしたが、回数を重ねて使用することで操作の方法や因果関係を理解し、自分でスイッチを操作して音楽を聴くことがあった。あまり好きではない曲が流れると、指先につなげたひもスイッチを操作して曲を変え、聴きたい曲が見つかるとうれしそうに音楽を聴いた。筋電スイッチは、他校から借用したもので、使

用する機会が少なく操作方法や意思表示をする手段としての活用が不十分であるが、実態から見て有効性のあるスイッチであると考えられた。

（エ）課題

訪問教育の授業は週３回、１回２時間と限られていることから、時間を有効なものにするために以下の３点を課題として授業を行いたい。

ａ　疑似体験の拡張・・・表出を確実なものにするため、繰り返し行う。また、場面設定することで表出の拡大を図り、般化されるよう学校―家庭―施設と情報を共有する。

ｂ　感触体験の充実・・・イメージが持ちやすいよう触って感じるものを厳選し、シンプルなものを選ぶ。また、様々なことを一度に体験するのではなく、少しずつ体験し雰囲気を感じやすいよう配慮する。

ｃ　集団学習の場の設定・・・体調を考慮し、場面に応じて集団学習の場を設ける。友達と関わりを持つ中で、感情を相手に伝えることや、自分の要求を相手に伝える力を身に付ける指導を行う。

重度重複障害児は、閉じ込め症候群状態にあると言われているが、Ａ子の場合は、言葉掛け等で反応することが多々ある。しかし、身体機能的に問題があるため、その反応が感情の表出としてとらえられなかったり、不随運動に見られたりすることがあるため、Ａ子のわずかな反応を見逃さず、発信を受け止め応えることを繰り返しながら、コミュニケーションの確立を目指していきたい。

５　成果と課題

（１）個別の教育支援計画、個別の指導計画、指導記録の作成、活用について

個別の教育支援計画、個別の指導計画作成にあたっては、より具体的な目標や内容を心掛け、毎年改良しているが、十分に活用できていない。特に、実態把握のあいまいさによる、目標が達成されない授業があったため、的確な実態把握を行う手段としての個別の教育支援計画、個別の指導計画の活用を図っていきたい。また、年間指導計画はあいまいな記述が多く、計画が毎回の授業に反映されていないことが多かった。計画をしっかり立てることで今必要なことを考え、活動を関連させ、継続していくことができる。そのための年間指導計画はどうしていけばいいか、様式も含めて検討していきたい。更に、個別の教育支援計画、個別の指導計画を活用した指導の充実に向けて研修を深めていきたい。

指導記録の作成では、項目を設けたことで内容が整理でき、必要なことをより簡潔に書けるようになった。必ず書いておかなければならないことを確認しながら、次年度に引き継ぐ際に有効なものとなるようにしたい。

（２）授業評価シートの作成、活用について

訪問教育用の授業評価シートを作成し、視点に書かれている項目の内容を確認することができた。

授業自己評価シートでは、視点に基づき、全体的な評価をし、反省点の原因を探り、次回への改善策、具体的目標を記述することで、これから何をしなければならないかが明確になった。考えを整理し、記録に残しておくことが授業改善の

ためには必要なことである。

参観者授業評価シートでは、参観した授業で当てはまる視点についての評価を３段階で行った。授業者の大体の傾向が分かり、評価される方はよかったが、評価する方は難しく感じることも多かったようだった。初めて訪問教育用のシートに記入する人にとっては、「視点」の内容が分かりづらいものもあったので、説明を加えるなどして分かりやすいものにしていく必要がある。改善案については、授業の具体的な場面から、改善に向けてのアイデアを記入することで授業者が気づかないことを具体的に指摘され、大変参考になった。

（３）授業実践について

学習指導案の作成、検討、授業実践、授業研究会、授業評価シートへの記入を通し、訪問教育の授業について考えるよい機会となった。よりよい授業をしていくために考えていかなければならないことは数限りなくあるが、今回の授業実践を通して、必要事項を以下のように確認した。

ア　姿勢

・生徒の様子に合わせて楽な姿勢に変換するなど柔軟な対応をする。

・授業の中で、動と静を組み合わせる。

・手を動かしやすい姿勢にする。机を用いる。教師の位置を考える。

イ　学習環境の整備

・教材がよく見えるように机の色や窓の外の景色に注意する。

・提示物を厳選する。教材に興味を持つまで待つ時間、選ぶ活動ができるよう工夫をする。

・２時間の授業の中で授業を行う場所や位置を変えることにより、変化を持たせ、興味を持続し、心の動きが大きくなるような展開を考える。

ウ　学習意欲の喚起

・事前学習では、前年度のビデオや写真、実際の映像などを活用する。

・興味・関心を大切にして自発的活動を引き出す。

・課題とした活動を定着させるためには、毎回の授業で、その場面を設定し、継続して行う。

エ　聴覚的支援

・絵本を読むときなど、声の調子を変えて、メリハリをつけて行う。単調にならないよう工夫する。

・視覚的な情報が得られない生徒に対しては、聴覚、触覚からイメージを持たせる。

オ　言語技術の活用

・嫌になったサインに気付いた時点で、気分転換を図る言葉掛けを行い、活動内容や視点を変え、違った方法でアプローチする。

カ　コミュニケーションの確立

・発声や、動作に合わせて言葉掛けを行う。

・生徒の反応をきかっけに、やり取りを行い、生徒の心の動きに寄り添う。

6　まとめ

ＰＤＣＡサイクルを活用した授業改善に取り組み、訪問教育の授業について深く考え、話し合うことで、他の教師の授業内容、授業の組み立て方、教材教具の使い方、支援の仕方がよく分かり参考になった。また、日ごろ疑問に思っていることや、悩んでいることなどを話し合うことで打開策が見出された。特にコミュニケーション面に視点を当てた授業については、多くの改善が見られた。他部の教師が授業研究会に参加することにより、訪問教育について理解を深めるよい機会となった。

研修を通して、受け持ち以外の児童生徒の様子を知ることで、集団学習や合同学習をより効果的に行いやすくなった。今後は、集団学習や合同学習を積極的に行い、同年代の友だちとの関わりの中でのコミュニケーション力を高めていきたい。また、日々の授業の中で、友だちの映像、声、写真、作品を見たり聞いたりすることをできるだけ多く取り入れることで、仲間意識を育てたい。

様々な人とのコミュニケーション力を高めるためには、関わりのあるすべての人との共通理解が必要となることから、気軽に話し合える関係を築き、積極的に情報交換を行っていきたい。

障害が重度になればなるほど、小さな反応も分かりづらく、適切な支援の在り方を求めて悩むことがある。身体の動きやスイッチの活用など、専門家の指導を積極的に取り入れ、理解をより深めていきたい。

重度重複障害の子どもたちとの関わりにおいては、子どもたちの思いをくみ取り、共感し合うことが重要である。今後もいろいろな場面で教師が積極的に話し合い、共通理解を深め授業に役立てたい。

参観者授業評価シート（訪問教育）

資料1

参観者	

授業者氏名		学 級	部　年　組	日 時	月　日（　）
教 科 等		単元名			

評価（A・・よい　B・・ふつう　C・・要改善）

	視　点		評　価	授業改善について
1	身体に関する基礎的事項	姿勢	A　B　C	授業の具体的な場面
		呼吸	A　B　C	授業の中で評価を行い、児童生徒の頑張りなどを褒めたり励ましたりする。
		発作	A　B　C	
		嚥下	A　B　C	
		感覚・認知	A　B　C	単語でなく、文として話す。
2	見通し	学習の流れの提示	A　B　C	
		個々のめあての提示	A　B　C	目的を説明しながら行う。
3	視覚的支援	絵や写真の活用	A　B　C	
		補助具の活用	A　B　C	「誰が」「何を」「どうする」かをはっきりさせる。児童生徒に伝わる話し方をする。
4	学習環境の整備	机上の整理整頓	A　B　C	
5	学習意欲の喚起	興味・関心をひく教材・教具の工夫	A　B　C	
		記録の活用	A　B　C	
		個々のめあてに基づいた評価	A　B　C	
6	聴覚的支援	不必要な音を取り除く	A　B　C	改善に向けてのアイディア
		リズムとテンポと繰り返しを生かす	A　B　C	
		声量や音量	A　B　C	することを順序立てて説明し、見通しが持てるようにする。
7	「言語技術」の活用	話型の提示	A　B　C	
		根拠の明確化	A　B　C	
		主語と文末	A　B　C	質問に答えられなかったとき、反応がなかったときには、言い方を変える。
		ナンバリングの活用	A　B　C	
		視点を変える	A　B　C	
8	コミュニケーションの確立	表情・行動の確認	A　B　C	表情の変化、自発的な行動を見逃さず受け止め、その意図や要求を推測し、言葉に置き換えて表現する。行動を言葉で表し、意味づける。
		意図や要求の推測・応答	A　B　C	
		言語化	A　B　C	
		発声・発語への支援	A　B　C	
		絵・文字の活用	A　B　C	

＊授業の中で当てはまる視点について評価する。